

本能論 — 要求論の基礎 (3) —

藤 井 龍 和

序—本能と煩惱

本能を平易に解釈してみるとどうなるであろうか。日常性の立場では、本能とは、「動物が後天的な経験や学習をまたずに、外圍の変化に対して行う統一的な心身の反応形式で、その種族にとって共通なもの」(「広辞苑」新村出編、岩波書店)とか、「(哲)教育経験の力をからず自然にはたらく能力」(「新修漢和辞典」小柳司気太著、博友社)となるようである。したがって、本能主義という、「本能を満足させることが、人生の最高目的であるとする人生観」(「広辞苑」)であり、「(哲)本能の要求すなわち肉体上の嗜欲を満足するのが人生の目的であるとする倫理学説」(「新修漢和辞典」)であって、享楽主義に通ずるものである。諸橋徹次著の「大漢和辞典」(大修館書店)で述べているのも、「新修漢和辞典」のと余り変わらず、「本来具有の性能。教育、経験等によらないで、自然に要求し自然に行動する順応的性能」と述べている。この一見何でもなしの語義解釈の中に、しかしながら、実に大変な問題がかくされているのである。

まず、本能概念を、日本国土に沿って、スケッチ風に概観してみよう。

アジアモンスーン地帯に位置する日本では、忍ないしは忍辱、または忍従を要とする風土心(Geopsyche)があったといわれる(和辻哲郎著「風土—人間学的考察」参照)。しかし、本能を本能と感じて生活する風土心があったらうか。これは如上の論理からして疑わしいと思わざるを得ないであろう。寒冷温暖ある風土日本、台風・地震・干ばつ等多かった災害国島国日本に、忍を忍としても、どうして個を主張する本能主義があったらう。それは、西欧に比し、弱かったといえよう。どこまでも個を主張する所謂合理主義、個人主義は、西洋に比し、東洋は弱かった。もっとも、日本古代の本能概念は、自然で、素朴で、よごれのないものであった。肉体上の嗜欲を満足さす1つの本能、エロスの追求にしても、本能はいけないものだともなく吐露しているのが、万葉集の相聞歌にみえる(福田和彦著「エロティシズムの歴史」エロトロジ—選書 No. 1. 林書店 昭42より)。

ときぬ おも みだ
解衣の思い乱れて 恋うれども

なぞ誰が為と問う人もなし (2620)

たま ねば玉のわが黒髪を引きぬらし

みだ 乱れて反に恋い渡るかも (2610)

また、大伴家持が大伴坂上大嬢に贈った相聞歌には、次のような奈良時代の貴族階級の性愛生活を活写している(同上書より)。

「叩々(「玉台新詠」の「何を以て叩々に致す」という詩句よりとっている)物思えば、言はむ術、せむ術も無し。妹と吾、手携わりて、朝には庭に出で立ち、夕には、床うち払い、(「枕席掃き清め」より由来)白梯の袖さし交えて(「歎愛枕席に在り、昔宿衣衾を同じくする」に由来、交接を象徴する)、さ寝し夜や、常にありける。あしびきの山鳥こそは、峰向い

に妻問すといえ。現身の人なるわれや、何すとか、一日一夜も、離りいて嘆き恋うらむ。(後略)」

日本では、本能という言葉が、文献上、または日常で、散見し、膾炙された例をまだしらない。「本能寺」は「本望寺」であろう。)それよりも、本性(生まれつきの性質)とか、煩惱(欲情・願望・瞋恚・愚痴などが心を煩わし、身を悩ますこと)という言葉の方が、まだ、われわれに親しみ深い。

めでたしと見る人の、心おとりせらるるほんじゃう(「天性」「生まれつき」「性質」)

見えむこそ、口をしかるべけれ。(徒然草、一段)

あだめき目なれたるうちつけのすきずきしさ(気まぐれなウワキ)などは、好ましからぬ御本性にて。(源氏物語、帚木)

あなわびし。煩惱(人間の欲情・煩悶・愚痴等、凡て心を煩はし悩ますもの)・苦悩かな。(枕草子)

しかし、このような言葉は、仏教的な苦の世界から脱却してないし、救われていない。本能は本性にしても、すなわち、生まれつき、天性であるにしても、本性(本心、正気)であることは、なかなかつかめなかった。それが、儒教的・倫理的・道徳的色彩を帯びるのは封建時代の後半期で、近代に至っても、なかなか、本能概念から離れられなかった。このように、本能が育った社会は、権威主義的封建時代に問題となったようであり、本能を、人間の欲動という観点から歴史的に見てみると面白い。

しかし現代でも、本能が明るい視野でとらえられるようになったとはいえ、本能という言葉の中には、いやらしいもの(淫猥・猥褻)、いけないもの(禁忌)という匂いがあるのである。しかしながら、本気になればやはりでてくる人間必然の力、自然抬頭的力、人間生きるに必須の力という把握の仕方もあるのである。本能は、根源的な生命力であろうか。このことを、本能概念の変遷と共に、心理学上、次に見てみたい。

I. 哲学的本能観より心理学的本能観へ

「なぜ人間は食べることに忙がしいんだろうな」「それは本能だよ」と家庭で言っても、さて、本能とは何だろう、という問いを投げかけると返答につまり、何だか解らないものになるのが普通である。本能とは食欲だよ、といっても同語反復をまぬがれない。「では本能とは何か」「それは食べることだよ」といっても通らない。かつて博物学者や心理学者が、「クモがみごとに巣をつくるのは造巣本能であり、アリやハチが集団生活を営むのは彼らに群居本能があるからであり、敵と戦う動物には闘争本能があるからだ」と説明したが、それは、「知能・経験によらずに、自発的にする動物の能力」(理学博士小野記彦監修「生物の事典」学習社)という観点からなされた生物学主義であった。牛は生れて20分もするとピンと立って母乳を吸う、という観察は、これを本能とみなした。クモは、人間と違うことをしよる。独特な才能をもっているな。というわけである。こういう訳で、広く生物学主義に立ってみると、造巣本能・帰巣本能(とりがねぐらへかえるなど)・群居本能(動物の集団行動性)・闘争本能(動物の盲動性)等々の動物の行動のみが本能であるとみとめられている。

しかし、人間も動物の一種であるから、動物と合同の行動はとりえないにしても、相似の行動は散見されるのである。これを称して類比的行動という。事実、動物や人間の能力を以て本能とする能力心理学の時代ならばいざ知らず、Ch. Darwin の進化論の発展した

今日では、人間も、動物の系統上にある霊長類である限り、遺伝反復的に、われわれの祖先が原始的な生活に於て行った活動を、個体発生的に繰り返すのであるとする。そして、人間は、未開から、このように文明にまで来たのだから、固定的な行動しかとれない野生の動物を見て、「動物は本能しかない」、「人間には理性がある」と誇らざるを得なかった。そこには人間の尊大な誇らしげな万物の霊長観があった。形而上学的観念論の哲学観があった。

しかし、哲学と袂を分かった心理学は、もっと唯物論の方へ走った。「人間にも動物と類比的な行動があるじゃないか。これは人間の本能だ。」という訳である。しかし、人間にも本能があるという本能という言葉だけ使っていても、内容は空虚になるばかりであった。「成程人間には本能があるか。してその本能とは。」「食べることだ」「でも、断食あり、動物も食わずとも、割合へこたらずにいるよ。本能とはもっと衝動的なものだ」。成程、客観的には人間内部の事情は推し測かれない。外面平然と断食している。事実、心がすわれば、自分が腹を空かしてでも、他の人に恵むことすら出来る（フランク著「夜と霧」を見よ）。事実フランクは、ナチスの強制収容所で、こんな行為が起きたのだ、といっている（フランク著「神経症Ⅱ」みすず書房）。フランクはこれをして、人間には愛がある、ホモ・アマンス（愛する人）としての存在がある。といっているのであるが。しかし、本能とは、アンネの日記に出て来るパンをぬすむ肥満のオジサンのように、衝動的で、不可逆的なものであろうか。やめようとしてやめられないものであろうか。どれ程、人間の本能を理性に照らしても、一般的人間を理性で救えるかは疑問である。どれだけ「人間には理性があり、愛がある」と哲学的に言い切れるだろうか。教育人間学的に人間の良い面を押し出せるであろうか。ソニミ虐殺事件など、人間の本能なのだろうか。性本能が本能なら、乱婚時代はいざ知らず、どうして独身で一生を過ごす人もあるのだろうか。やはり、弱肉強食の世界原理が支配しているのだろうか。

こうなると大分、本能概念もゆらぎ、人間の本能もたわいないものになって来る。正に、どこまで自発的か、ということが問われるべきである。正に、哲学的本能観は、生物学主義であり、古典的行動主義であった。

このようにして、心理学主義で以てしては、本能という哲学的形而上学的な固い言葉を打ち砕く作業が必要であった。それには、博物学者のやったような、行動を分類挙することが手っ取り早かった。かくして、本能行動の分類学、古典的行動科学が始る。かくして本能の使用例は6000種もあるといわれるようになった。

W. Wundt は、自己保存の本能と種族保存の本能の2つあげ、S. Freud もこれにならった。

William James (1842—1910) があげた本能のリストは32であった（“Principles of Psychology 1890”）。そして特に、社交性・同情・愛情・嫉妬・模倣を社会的本能としてあげている。

W. McDougall (1871—1944) はより本能説を進め、社会行動の説明にもこれを拡張し、“Introduction to Social Psychology 1908” で本能リストを発表し (12)、その後少しづつ修正を行っている (16~14)。

E. L. Thorndike (1874—1949) は、更に多くのリスト (42) を挙げた（“The Original Nature of Man 1913”）。

Warren, H. C. は 26。

Allport, F. H. は 6。

その他、経済学者 Thorstein Veblen (1859—1929) は、“Instinct of Workmanship 1914”を著し、社会学者 Wilfred Trotter は、“Instincts of the Herd in Peace and War 1916”を書き、経済学、社会学に於ても、本能概念は問題となったのである。本能 (instinct) はかくして、複数概念 (instincts) となったのである。しかし、本能の分類につき、数や概念の一致をみななかった。それで、それは、本能否定論へと傾斜した。

しかし、アメリカ社会学者バーナード (L. L. Bernard 1881—1951, ワシントン大学教授) は、250名の著者、295冊の著作中、2539の用例があり、そのうち 500 種余は相互に区別しうる意義が与えられていたという (“Instinct 1924”)。

したがって、本能の分類表をつくらうとすると、大変なことになったのである。

精神分析学派のブリル (A. A. Brill 1874—1948) は、「すべての行動の源は、飢えと性の2つに帰される」といい、ユング (C. G. Jung 1875—1961) は、栄養 (飢え) と社会と性だけが一次的という。時には、利己主義的・利地主義的・動物的・芸術的・宗教的な本能なども付加する。

ソーンダイクは、本能を分類する場合の基準として、(1)機能的、(2)結末たる行動様式、(3)発端となる刺激状況、(4)発達の親近性について述べているが、この系統をひく、アメリカの児童心理学者カークパトリック (E. A. Kirkpatrick 1862—1937) の図式はもっと優れている。

○カークパトリックの図式：

- A. 個人ないし自己保存の本能……摂食・恐怖・闘争。
- B. 親としての本能……性・求愛・自己顕示・営巣。
- C. 社会的本能……集団への適応・共通の福祉のための協力・仲間を求める・集団の承認を求める・誇り・野心・競争・嫉妬・当惑・恥辱。
- D. 適応的本能……自発的活動性・模倣・遊戯・好奇心。
- E. 規則的本能……遵法心・道徳的傾向・高い権威を認める宗教的傾向。
- F. その他……収集所有・建設破壊・コミュニケーション・審美的。

この他、人間性の中に、本能的な部分があることを指摘するものに、ニーチェの「権力意志」や、個人心理学のアドラー (A. Adler 1870—1937) が説く、「優越への衝動または力への意志」とか、アメリカの心理学者でハーバード大教授のマククレランド (D. C. McClelland) たちの「達成の動機ないしは欲求」(1953) などがある。

アメリカの心理学者でイリノイ大教授であるキャッテル (R. B. Cattell 1905—) の人格説もこれと同巧異曲であって、人格の構成因子たるエルグ・情操・態度の秩序ある階層を、因子分析法によって見出そうとするものである。彼がエルグとよぶものは、マクドゥガルの本能 (propensity) に似ており、性・群居性・母性的保護・探索・逃避・自己主張・自己愛などのことである。情操は、職業とか宗教・スポーツなどに対してわれわれの抱く意識的感情で、個人的経験によって獲得されたものである。また態度とは、活動への動機ないし意図とほぼ同じ意味で、誘因を期待している状態である。

II. W. McDougall の本能論 (McDougall's Hormic Psychology)

こうした中で、一番公式的な本能論は、W. McDougall (1871—1944) の本能論であった。彼はかくて20世紀始めのイギリス心理学界の大長老となり、彼の本能の分類は、その

後の心理学の模範となった。彼が大長老たりえたのは、本能を以て社会行動の説明にもあてたためであり、かくて社会心理学への道がひらかれた。更に、「行動 behavior」という言葉を最初に使ったのは彼で、それは1908年のことであった。かくて、行動科学者としての嚆矢になるのである。蛇足ながら「行動」ということばを心理学用語にしたのは、ミシガン大学の教授ピルスバリーである（1911年）。なお、「行動」ということばは、行為（conduct）と違って、価値概念が含まれていない。

さて、W. McDougall は、その学本来の土台は、「心は元来生来的に備っている」とする Descartes（17世紀）の、あるいは Leibniz（18世紀）の本有観念の説に派生している（拙稿「反射学 一要求論の基礎 (1)一」大手前女子大学論集2号参照）。彼にあっては、instincts は、心の権化であった。そして近代心理学の始祖 Wilhelm Max Wundt（1832—1920, 19世紀）の構成心理学（彼は1879年ライプチヒ大学に世界最初の心理学実験室を設けた）により、自己保存及び種族保存の本能の目的論的な考え方を止揚発展させて、(1)自己維持のための行動とみられる自己本能（これは、S. Freud では人間の生物的存在としての防衛機制 defence mechanism の考え方になっていく）と、(2)社会生活に必要な本能（所謂、人間の社会的存在としての社会行動の説明になる）と、(3)それらの介在的・過渡的・媒介的・橋渡しの本能、の3つに分類した。しかしながら、その分類根拠は、W. Wundt の、知的素質 (intellektuelle Anlagen) と情意的素質 (Gemütsanlagen) の2分的心的素質 (geistige Anlagen) に依っており (Grundzüge), より本能の根拠が情意にあるにかかわらず、これを2分していない古典的範疇からなるものである（正に、パーソナリティ機能を「知的」機能と「情意」機能に2分する方が、長い伝統をもつ考え方であるが、テテンス (J. N. Tetens 1736~1805) (18世紀) 以来、抽象的な知・情・意3分説にわざわざいわれて、哲学、倫理学などでも、感情と意志を別個に論ずることが多かった。）。正に、McDougall の本能説は、それ以前のイギリス連合主義 (1650~1855, 17・18・19世紀) の影響を余りうけず、また、英連合派最後の人 Alexander Bain (1818~1903) の人格三分説・心理3分説 (Intellect, Feeling, Volition) にわざわざいわれることなく、古典的なところ、感情と意志の両過程の密接な連関を指摘していた（それだけに、近代的合理主義の知・情・意3分説をとっていない）。

彼は、本能を、かくして、反射に次ぐ要求行動のあらわれとみ、本能の中に情緒が含まれるものとみた。情意の統一の把握である。そして、情緒は、本能的衝動の手掛りであるとした。正にこれは、生得的動機、あるいは遺伝的傾向であるという。かくして情緒と対置せしめて本能を分類した。

(1)はっきりした情緒をともなう本能

- 1) 逃走本能—恐怖 (The Instinct of Flight and the Emotion of Fear)
- 2) 拒否本能—嫌悪 (The Instinct of Repulsion and the Emotion of Disgust)
- 3) 好奇本能—驚異 (The Instinct of Curiosity and the Emotion of Wonder)
- 4) 闘争本能—怒り (The Instinct of Pugnacity and the Emotion of Anger)
- 5) 屈従本能—屈服感 (The Instinct of Self-abasement [or Subjection] and the Emotion Subjection [or Negative Self-feeling])
- 6) 誇示本能—得意 (The Instinct of Self-assertion [or Self-display] and the Emotion of Elation [or Positive Self-feeling])
- 7) 親の本能—慈愛 (The Parental Instinct and the Tender Emotion)

- (2)はっきりした情緒を伴わない本能
- 8) 性本能 (The sexual instinct or instinct of reproduction)
 - 9) 群居本能 (The gregarious instinct)
 - 10) 獲得本能 (Instinct of acquisition)
 - 11) 建設本能 (Instinct of construction)
- (3)一般的生得的傾向 (人間関係を成立せしめる本能的傾向)
- 12) 同情または共感 (sympathy)
 - 13) 暗示および被暗示性 (suggestion)
 - 14) 模倣 (imitation)
 - 15) 遊戯 (play)
 - 16) 気質 (temperament)

(1)は自己防衛的・セルフバリヤー的本能であり、(3)は社会的本能であり、(2)は介在的文化本能である。

しかし、本能を論ずるときも、本能説をうけ入れるわれわれにしても、究極は個人心理学的な概念範疇にとらわれ勝て、一般に流布した McDougall の本能説は、次のような13を数えた(1923)。

- (1) 逃避本能 (逃走・自己保存・危険を意識するもの) — 恐れ (恐怖・驚愕) を伴う。
- (2) 闘争本能 (争闘・攻撃・争い好き・好争の類) — 怒り (憤怒・激怒) //
- (3) 拒否本能 (反撓 //) — 嫌悪 (胸が悪い・忌み嫌いの類)。
- (4) 哺育本能 (親的・求親本能・保護本能) — 優情 (愛情・慈愛・やさしさ) を伴う。
- (5) 求援本能 (哀訴本能) — 困惑 (頼りなさ・みじめ・よるべなさ) の感情を伴う。
- (6) 求偶本能 (配偶・番い・生殖を求め性的) — 肉欲 (性的興奮・愛欲・色情) に貫かれている。
- (7) 求新本能 (好奇・探究・発見・研究・詮索の心である) — 好奇 (好奇心・驚異・不思議・未知の感情) である。
- (8) 服従本能 (屈従・自己卑下である) — 卑下 (劣等感であり、従属の感情であり、劣弱・献身・謙遜・愛慕・服従の情が伴う)
- (9) 支配本能 (自己主張・誇示するのである) — 自負 (優越感の感情をもちたいと思うものであり、傲慢・得意・意気揚々・支配感がみられる)
- (10) 群居本能 (社会本能) — 孤独 (孤独感があるからであり、ある時はノスタルジア(郷愁)を想い、寂寥の感情が根本にある。従って群を求めるのである)
- (11) 求食本能 (狩猟本能) — 食欲 (食物探索欲があるからであり、食い気という情緒を伴う。好味なるもこの一種である)
- (12) 貯蓄本能 (獲得本能) — 所有感情 (守護の感情があるといわれる)
- (13) 構成本能 (物を造らんとする行動にみられるものである) — 創作感情 (創造・製作・生産のよろこびである)

その他、**笑いの本能** (彼は泣くことは本能だといわなかった。それは教育されると制止する装置が働くからであろう。しかし笑いほどんに抑えても抑え切れず、自然なものであるというのであろう) — **娯楽** (愉楽の楽しみであり、陽気を求め、注意緊張なくめでいることを嫌い、弛緩を求めるものである)。

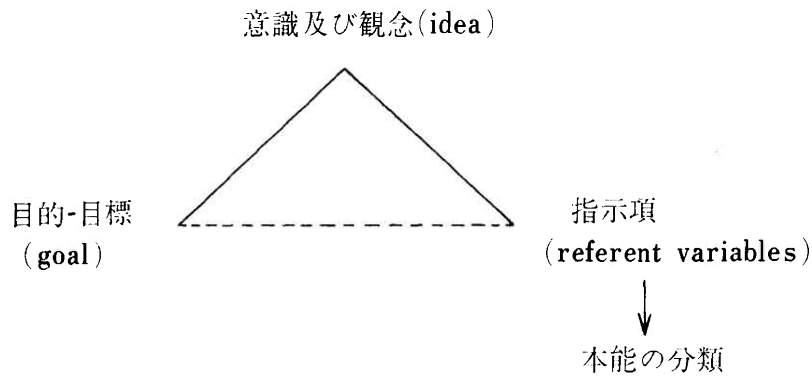
上記のほか、搔く、くさめする、咳をする、放尿、排便のような小さな本能もあること

を指摘しているが、これらには、これに伴う明確な情緒的な体験というようなものは認められないといっている。しかし、緊張緩和 (**tension reduction**) という心理学の原理には当然思い至っていたと思われる。放尿・排便などは、必ず尿意・排意がある筈であり、後に爽快感があるからである。いずれにしても、心の本意を、本能なる言葉に置きかえ、情緒的な面の分析をも加えて行動の分析に至ったということは買われてよい。

◇ ◇ ◇

McDougall は、このようにして、本能を始めとして、行動を喚起する様々な衝動を、行動の媒介変数として仮設した。

図 1 目標追求行動 (goal seeking behavior) からみた本能の構築された図式



彼の本能分類は一応それはそれで意味あるものであった。しかし、学者間でその数が異なり、どういう基準で分類するかにも問題があった。また、排泄・休息等の如き基本的要求も数えるべきだとか、服従・支配・群居などは生来的根源的といえるかどうか疑わしいという見方もあった。個人差もあろうし、公式的にならない、という見方、更に情緒との対応も、例えば所有感情とか創作感情というのは、物をもちたい・物を作りたい、ただそれだけのものを意味するのか、文化へつながるように説明すべきではないか (cf. 後述 Malinovsky) ということもあった。どれだけ個人主義的な個の存在を追求しても、環境の要素の介入を排除することはできない。結局本能の現われ方が、目的の下に統一されても、その現われ方は、目的との関係で、常に周知の状況に影響されることになり、ロックの経験論を入れざるを得なくなる。こうして環境の影響、自然的・社会的影響を考慮に入れるならば、本能の数は数百を以てしても足りぬことになる。この点の不備が第一の欠点であった。こうして、彼の観点は、固定的なもの、解ってしまったならつもらぬもの、と見なされるようになった。

こうして、McDougall の本能論は、「主観的」「観念的」「非科学的」とみなされた。

第二に、彼の分類は、厳密な実験による裏付けが欠けていた。当時の20世紀初頭の同時代人には、Pavlov (1847—1936) が条件反射学を提唱し、人間は、根源的な力たる本能で制御されるのではなく、環境が与える条件的な刺激によって形成され反応するのだといった。更に、これも同時代の J. B. Watson (1878—1958) が、本能無用論を唱え、動物心理学の研究から、「人間は反射的動物である」という考えの下に、心なき心理学の道を選んでいた。彼は、行動主義 (Behaviorism) の名の下に、刺激 (S) と反応 (R) から人間が理解出来るという「人間機械」論を唱えた。正に、反射学である。当時、行動主義は、Watson 一人の心理学で Watsonism であったが、後に、人間の未来を予測し、人間の行

動を勇気づけ、可能性への道を開く、合理主義的科学として受け入れられるようになる。こうして、McDougall の本能論が、骨董趣味的に墮し、主観的・観念的・非科学的とみなされていく因が存するのであり、一方、Pavlov や Watson は、科学的・実証的とみなされるようになるのである。事実、後の2人は、実験によって、地道ではあるが、確実な根拠を積み重ねて行ったからである。

結果として McDougall の理論は、「非科学的」にみえたが、行動科学への現代的傾向を孕んでいた。それを次に紹介しよう。

第一に彼は、社会行動の研究(分類(3))に於て、社会科学たる社会心理学への道を開いた。

第二に彼は、本能を末梢的微視的に研究しそれを分類したのみならず、本能というカタマリ(Gestalt)を真向から問題とした。彼は、生物学者としての訓練を受けた心理学者である。依って、彼の見た本能とは、「様々な目的を人間に生じさせる生得的な自然エネルギーの一種、自然的欲求」であった。意識とはエネルギーの一種であり、「熱と同俣であって、それはいずれ将来、正確に定性定量しうるようなもの」であった。かくて彼の、本能とは「先天的な知覚システム」という立場が先ず出て来る。McDougall の仮設した本能は、こうして、元来、求心・遠心(afferent-efferent)の方向をもち、知覚・運動の両レベルの神経現象にまたがる制御媒介変数として説明されていく。しかし、根源力は、神経系でしかなく、神経系で起る大部分の現象は無意識であり、新しい過程だけが意識されて、その目新しさが減少するにつれて、本能も弱まり、意識のされ方も弱まる。すなわち、微視的になればなる程、Watson が反射学的思考に走ったように、本能も意識も無用、ただ意識されていた行為が残した習慣ないしは反射だけが手掛りとなり、これをいかにとらえるかこそ科学的だ、ということになるのである。実際、人間の本能を考える場合、動物にみられるような比較的固定的定型的な反応を見出すことは困難であり、また見出されたものは一般に反射・反応といわれた方が妥当であろう。しかし、McDougall の学問的生命が殆んど失意と落胆のうちに排斥されても、又、晩年、「書けば書くほど、どうも私はますます敵意を挑発するらしい」と嘆息をついても、彼の立場は不動であった。それを次の本能の定義にみることが出来る。

「われわれは、本能を、遺伝的または生得的な精神・物理的傾向(psycho-physical disposition)と定義することができる。本能は、それを所有するものの知覚(perception)、特定の群に属する対象への注意(attention)、この対象を知覚することにより起る特定の質に属する情緒的興奮の経験(emotion)、それに関して特定の仕方の活動(activities)、または少なくともこうした活動への衝動(propensity)の経験を決定する」

ここで読者は、傾向(disposition)・衝動(propensity)という言葉に注目すべきである。彼の巨視的観点には、その後数々出て来るもので、現代の要求論につながる、すなわち、本能の概念の曖昧性をくつがえす、欲求(want)・要求(need)の概念の抬頭を告げる胎動がここにあるのである。彼のダイナミックな考え方は1932年に発表された「人間のエネルギー、力動的心理学の基礎に関する研究」(“The Energies of Men, a study of the fundamentals of dynamic psychology. 1932)で明らかにされた。註：動的心理学の語を初めて用いたのは Woodworth である。(Dynamic Psychology 1918)

「この答を受け入れる目的的心理学は、ホルメ心理学(hormic psychology)である。それは、各動物の種(species)は、非常に構成されているので、ある自然的目標を求め、努

めるその目的は、動物の対応する要求 (need) を満足さす。動物を満足させるこれらの要求や傾向 (tendency) および対応する目標に向う努力 (strive) に対する要求や傾向は、生得的 (inborn) で、種の成員によって世代から世代に伝えられるから、これらの要求や傾向は、本能的 (instinctive) と呼ばれる。かかる生得的傾向は、しばしば本能 (instinct) として語られようが、この語は、controversy (議論) や needless difficulties (無意味な臆念) を惹起することなしには使われないから、それを避ける方がよい。ここでこれを使う最もよい方法は、good old word である 'propensity' である。」註図 1 参照。

ここで Hormic Psychology (ホルマー心理学) という言葉が出て来るが、これは McDougall, W. が自己の心理学の立場を特徴づけるためにつくり出した称呼で、Murchison 編の「1930年の諸心理学」(Psychologies of 1930) の中の一編に、この名を冠して寄稿しているものである。ホルマー (hormē) は衝動激発の意味をもつギリシャ語で、ここでは発動性をもつ力 (エネルギー) を意味している。この立場では、一般に精神物理的な生活体の事象は、物理学化学の面で解き明かされるような因果関係で規定されるものではなくて物理的・化学的領域を超えて、生来的に備っている性向や傾性や推進性などのような有目的性の諸要因によって決定されるものであるとしているのである。動物心理学の分野で、動物行動を解明するのに、その行動が、一定の目的に向っていとなまれるという teleological な事実を指摘しているのである。そしてその根幹は、要求論の基礎(2) (「行動の生物・社会的次元」大手前女子大学論集 3 号所収) で述べたような、生物的次元になる Homeostasis 的統一体が、基底にあるのである。そのような、生理的・ホメオスタシスの平衡次元から衝動のエネルギーがまず解除され、行動発生をみるのである。この点に於て、旧来のとかく固定的な本能概念を打破し、力動的な概念にした貢献が彼にある。これは旧来の主知主義を排して、主体の意志を重んずる主意主義であろう。その意味で、行動の反射学的機械論的考察を一步すすめるものであり、近代の生気論的動機論 (motivational な観念) に一步近づくものである。このことについてはあまり知られていない。行動の研究に至った McDougall としては、単なる反射学的機械論ではどうしても規定し難いものが残ったのであろう。しかし、旧来の本能概念では凝固的であるので、更に力動的な概念として、propensity という語を本能 (instinct) の代りに使おうとしたと思われる。propensity という語は、古語で, propend (…に傾く, …する気になる, incline, tend to do) という動詞, および propense (…の傾向のある, …し勝ちの, prone to) という形容詞から来ている。したがって、傾向・性質・性癖 (bent, inclination, tendency) という名詞形であるが、McDougall の、生理学的平衡としてのホメオスタシスの枠組内のバランスを基底とする、その全一的力動的そして主意主義的目的論的概念であるということより考えると、「衝動」と訳した方がよい。旧来は、この propensity も、日本では、本能なる語で代表せしめて紹介していたが、それでは、彼の論旨を正確に伝えていないと思う。更に、彼の propensity の用語には、情動を併置させているのである。情動の本性は、生物が危機に直面した時に起る身心 (肉体と精神) の反応であって、あらゆる身心のエネルギーが動員されるのである (カノンの情動危急説 emergency theory)。McDougall では、W. Wundt の感情の三方向説 (第 1 系: 快—不快 Lust—Unlust 系, 第 2 系: 興奮—沈静 Erregung—Beruhigung 系, 第 3 系: 緊張—弛緩 Spannung—Lösung 系, 1896) の後を受けて、「情動は、自己保存、種族保存を窮極の目的とする本能的反応の感情的側面である」とみなしたのである。そこには、人間の生れつきの傾向・傾性 (innate propensity) としての本能が語られてい

る。このようにして、人間の生得的特質 (native endowment of man) として語られる先天的傾性は、彼の著「人間のエネルギー」(“The Energies of Men, a study of the fundamentals of dynamic psychology. 1932.”) に於て、18の傾性項が数え上げられ、終極的にまとめられた。

McDougall に於ける衝動の分類 (innate propensities)

1. 食い気 : to seek (and perhaps to store) food. …… (food-seeking propensity)
2. いや気 : to reject and avoid certain noxious substances …… (disgust propensity)
3. お色気 : to court and mate. …… (sex propensity)
4. ドッキリ気 : to flee to cover in response to violent impression that inflict or threaten pain or injury. …… (fear propensity)
5. のぞき気 : to explore strange places and things. …… (curiosity propensity)
6. 可愛い気 : to feed, protect and shelter the young. …… (protective or parental propensity)
7. ^{ヒトケ}人気 : to remain in company with fellows and, if isolated, to seek that company. …… (gregarious propensity)
8. 威張り気 : to domineer, to lead, to assert oneself over, or display oneself before, one's fellows. …… (self-assertive propensity)
9. 狂気・怒気・爆発の気 (カンシャクモチ) : to resent and forcibly to break down any thwarting or resistance offered to the free exercise of any other tendency. …… (anger propensity)
11. 救い気 (オ助け) : to cry aloud for assistance when our efforts are utterly baffled. …… (appeal propensity)
12. 創作力 (オリジナルなケ) : to construct shelters and implements. …… (constructive propensity)
13. 欲深気 : to acquire, possess, and defend whatever is found useful or otherwise attractive. …… (acquisitive propensity)
14. 野次馬根性 (擲揄気・茶目ッ気) : to laugh at the defects and failures of our fellow-creatures. …… (laughter propensity)
15. なぐさみ (焦燥のケ・ウキウキ) : to remove, or to remove oneself from, whatever produces comfort, as by scratching or by change of position and location. …… (comfort propensity)
16. 眠気 : to lie down, rest and sleep when tired. …… (rest or sleep propensity)
17. うろつく気 (ホツキ虫) : to wander to new scenes. …… (migratory propensity)
18. 吐き気 (もよおす気) : a group of very simple propensities subserving bodily needs, such as coughing (咳), sneezing (くさめ), breathing (呼気, 吸気), evacuation (排泄)。

こうして、旧来の本能は、McDougall に於て、人間の全一体として理解された。彼の propensity に関する解釈は、旧来の、個人心理学的な能力心理学の「能力」という観点、中国・日本の古来からある養気説の「気」の観点、禅的な解釈たる人生味の「味」、この頃入口に膾炙される「根性」、日常的な言葉である「カンシャクモチ」などの「モチ(持)」、^{クワインヤ}「ヒツキ虫」などの「虫」、スカンタレの「タレ」、キカン坊の「坊」などによって理解

されるとよい。正に、彼の心理学には気の心理学があるのである。彼の心理学は、医学を修めた経験から神経学研究の後、かかる生物学的立場に立っているのであって、進化論的・目的論的方向をとったことから **propensity** たる **instinct** を主視し、ホルメ説をとったのであり、かくして彼の本能の評細な分類方式はひろく知られているのであり彼の肉体と精神の研究の成果がここに表われている。またネズミの遺伝的研究から、獲得性質 (**acquired characters**) の遺伝を主張したのは有名である。更に、本能論の拡張から集団心の研究に進み、社会心理学の樹立に大なる影響を残した。たとえば、前項の、可愛い気、人気、救い気があるかないかの議論は、他人的他我的存在を意識している（日本語は特にそうである）のであって、全く、偕人間的 (**Mitseelische**) な問題なのである。正に、**McDougall** の力動的心理学を、気の心理学で以て見直すと、**W. Hellpach** の気の理論（社会的気質の理論：和気と争気）と対置し合って、大変面白い。最後に、この節を終えるにあたって、**McDougall** の著書を紹介しておこう。

An Introduction to social Psychology, 1908.

Body and Mind, 1911.

Psychology, the Study of Behavior, 1912.

The Group Mind, 1920.

Outline of abnormal Psychology, 1926.

気について——：さて、この項で最後に附加されるべきものは、「気」とは何か、ということであるが、現在、「気」は、2つの異った使い方があり、1つは、自然現象における気の使い方であり、沢庵禅師流にいうと、天の理の中における気である。もう一つの気の使い方は、人間の精神現象としての気であり、沢庵禅師流にいうと、人身の部の気、人性の気の意味であり、パーソナリティ体系内における気である。もう一つは、附加的現象、第一の自然現象と、第二の精神現象の総合性の中に、その相互作用の場としての人間社会の中で見出される気であり、かくして、3様の使い方が結論的にはあるといえることができる。

(1)、第一の自然現象における気としては、大宇宙の自然・土地・風土を根拠として生ずる気が先ず存在するであろう。

イ) それは、まず、ガス体として存在するもの、という意味がある。空気、大気がそうである。この範囲の中に入る気を使った用語には次のようなものがある。

……気体・水蒸気・気圧・気密・気流・気温・気化・気泡・気動車。

ロ) 第二には、自然現象でも、イ)のようにその存在のあり方ではなく、動きの理としてとらえられるものである。すなわち天地間に起る自然現象としてとらえられるものがある。

……気象・気候・空気・大気・天気・熱気・湿気・電気。

ハ) 第三に、自然現象でも、人体の自然現象がある。これは、唯物的・生物学主義的・自然科学的に十分言いうるもので、全く、人間の肉体的活動といていい、「口から出入りする息」のことをいう。またその附随的器官の名に使う。

……気管・氣息。

ニ) 第三は、一期15日。五日を「候」、三候を「気」という。……24気・節気・気候。

(2) さて第一は、十分に、自然科学的根拠に基づいて考察されるものであるが、この部類に入る「気」とは、人体内の目にみえない働きとして現われるもので、全く、精神の存在を示し、その働きとしての心持ちを表わすものである。全く人間は、人性の気を持つこ

とによって人間たりうるというわけである。この基底から使用される気のあり方は、次のようなものがある。……気概・気焰・気鋭・氣勢・気魄・気力・気風・気分・気質・気性・心気・人氣・意気・本気・勇気・和気・争気・狂気・怒気・短気・病気・親切気・才気・士気・血気・邪気・平気・妬気・英気・俠気・剛気・殺気・浮気。

(3) さて第三の、社会的風土の中より生ずると思われるものは、第一の自然と第二の精神を介して現われる。それは、事理無げなもので、自然現象にも、人事現象にも妥当する。気運・気味・元気・活気・生氣・雰囲気がそうであり、さらに、夜気・神気・酒気・毒気・習気・鬼気がそうである。

さて、気は、単に自然現象と人事問題と分けて平面的に解釈すべきものではなく、もっと、自然を上にして、人事を下にした場合の縦の解釈も必要である。上の分類の中にも、そういう気の使い方もあるのであるが、ここでは、この気の研究に深く立ち入ることをさげ、上述でのべられなかった気の使い方を記すに止めておく。……一気・二気・人氣 (popularity)・正気・同気・邪気・秀気・佳気・氛気・奇気・風気・客気・香気・食気・候気・海気・時気・活気・純気・脚気・猛気・理気・淑気・爽気・望気・寒気・盛気・雲気・紫気・嵐気・逸気・勝気・意気・溢気・義気・魂気・豪気・鋭気・精気・声気・激気・乱気・胆気・覇気・驕気・靈気・平坦気・居移気・食牛気・脂粉気・活然気・蓋世気・一困和気・人生感意気・有死心無生氣・気力・気丈・気分・気宇・気死・気色・気使・気俠・気品・気風・気海・気格・気骨・気根・気配・気脈・気絶・気稟・気数・気節・気魄・気穢・気韻・気籟・使気・負気。

岩波の国語辞典(西尾実ら編)には、気の使い方を次のように載せている。

①心の動き (movement)・状態 (status)・働き (function)。精神 (Geist)。(mind, Psyche)「一を静める」「一が狂う」「一が散る」「一がきく」(ちょっとしたことにも心が行き届いている、また、しゃれている)「一がつく」(しなければならないことに心がまわる、また、失神から意識をとりもどす)「天地正大の一」

イ)人の持つ精神の傾向 (inclination, tendency)。「一が短い」「一が荒い」。気立て (disposition; temper; a turn [cast] of mind; nature) : 「一がいい」。

ロ)緊張した、または盛んな精神 (tenseness, strain; tensity, tension; passion)。「一をくじく」「一が抜ける」「一をはく」

ハ)何事かをしようとする心の動き。(配慮 Besorgen, 憂慮 Sorge, 顧慮 Fürsorge,) つもり。考え (Denken 思考)。「どうする一だ」「一が知れない」。あることをしようとしてそれに引かれる心、関心 (concern, interest) : 「一が進む」「一を引く」「一を入れる」(一心に打ち込む)「一を持たせる」(相手に関心・期待をもたせる)。人を恋慕う心 (Sehnsucht; longing, yearning, deep attachment, love) : 「あの女に一がある」

ニ)あれこれと考える心。(care, trouble, worry)「一をもむ」「一に病む」「一をまわす」(ひがんで邪推する)。注意 (attention)・憐憫 (compassion, commiseration, mercy) : 「一を配る」「一に掛ける」「一がさす」(心に掛かって不安だ)。心配 (fear, uneasiness apprehension, anxiety; pity) : 「一になる」。遠慮 (fear, reserve, deference, modesty) : 「一が置ける」(気がかりで打ち解けられない)

ホ)感情。(feeling)・情緒 (emotion)・激情 (passion)・情操 (sentiment)「一まずい」「一を悪くする」(感情を害する)

②ふんいき (atmosphere)。漠然とした感じ。「殺伐の一がみなぎる」

③空気などの気体 (air, gas, vapor)。「海の一」

④呼吸 (breath, breathing, respiration)。「一が詰まる」(呼吸もできないほど窮屈だ)

⑤ある物に特有な、香 (smell, odor, scent; aroma 芳香 fragrance, perfume) や味 (taste, relish, salt, flavor, seasoning, zest)。「一の抜けたビール」

さて、純粹のこと、まじりけのないこと、人手を加えてないことを、き (raw, unmixed, pure), というがこれは、気をあてず、「生」をあてる。……「一のまま」「一で飲む」(straight)」「一むすめ」「一まじめ」「一ぶどう酒」「一糸」

Ⅲ. その他の本能論 (Other instinct theories)

Woodworth, Robert Sessions (1869～) は、行動の基礎としての本能的行動を、経験によらない動機 (unlearned motives) と呼び、Bernard の本能分類に依っている (遠藤汪吉著「心理学」三和書房, 昭26¹, 昭28⁴)。

○Woodworth の本能の分類 (Bernard: Instinct, 1924, 159 p.)

I 生物的欲求に対する反応 (Responses to organic needs)

渴きの本能 (**Drinking** instinct)

飢えの本能 (**Hunger** instinct)

吸啜, **Sucking**.

嚥下, **Swallowing**.

咀嚼, **Chewing**.

母体の乳房を求める, **Seeking** the breast.

乳房をはなす, **Rejecting** the breast.

不味な食物を吐き出す, **Spitting** out bad-tasting food.

狩猟する (**Hunting**)

うずくまる, **Crouching**.

忍びかくれる, **Stalking**.

飛びかかる, **Springing**.

なぶり苛める, **Teasing**.

食物を貯える (**Food-storing**)

呼吸および空気を求める本能 (**Breathing** and **air-getting** instincts)

空気を探し求める, **Air-hunting**.

無駄な動きをしない, **Waste-elimination**.

熱や寒さに対する対応 (Responses to heat and cold)

発汗する, **Sweating**.

皮膚が赤くなる, **Fluohing** of skin.

皮膚が青くなる, **Paling** of skin.

身震いする, **Shivering**.

熱で身をすくめる, **Shrinking** from heat.

寒さで身をすくめる, **Shrinking** from cold.

危害に対して身をすくめる (**Shrinking** from injury)

屈折反射, **Flexion reflex**.

まばたき, **Winking**.
ひっ搔く, **Scratching**.
皮膚を摩擦する, **Rubbing the skin**.
咳をする, **Coughing**.
くしゃみする, **Sneezing**.
喉のつかえをとる, **Clearing the throat**.
たじろく, **Wincing**.
よろよろとする, **Limping**. } defence action
もがく, **Squirming**. }
工合の悪い姿勢を変える, **Changing from an uncomfortable position**.
逃走, **Flight**.
身を縮める, **Cowering**.
身をすくめる, **Shrinking**.
身を躲す, **Dodging**.
打撃をうけとめる, **Warding off a blow**.
出来るだけ狭い場所に押し合う, **Huddling into the smallest possible space**.
掩いのあるところに潜む, **Getting under cover**.
他の人にしがみつく, **Clinging to another person**.
泣く, **Crying**.
疲労する, **Fatigue**.
休息, **Rest**.
睡眠, **Sleep**.

II 他人に対する反応 (Responses to other persons)

群居本能 (Herd instinct or gregarious instinct)

独りで居ると落着かない, **Uneasiness when alone**.
仲間を求める, **Seeking company**.
仲間外れから守る, **Remaining in company**.
人の尻ばかり追うひっつき虫, 尻つき虫, **Following**.

異性を求める本能 (Mating instinct)

気どる, **Strutting**.
身なりを飾る, **Decoration of the person**.
腕前を自慢する, **Demonstrating one's prowess**. (cf. 慢清浄「理趣経」).
異性崇拜, **Admiring attention to one of opposite sex**, 気をひく.

養育本能 (Parental or mothering instinct)

子を哺くむ, **Feeding the young**. 哺育.
子の身体を温める, **Warming the young**.
子を危険からかばう (**Defending the young**) 註

註：この項に関しては、ツルゲニエフ（1818～1883）の詩「すずめ」がわれわれの注意を惹く。「私は獵から帰って、庭の並木道を歩いていて。すると、私の前の方へ、犬が駆けて行った。ふと、犬は、刻み足になって、あたかも鳥をかぎつけたかの様に忍び足をしはじめた。私は並木道伝いに、ずっと目を配って見た。そして、まだ口ばしのあたりの黄色い、頭にふふ毛

の生えた一羽の子雀を見つけた。子雀は巣から落ちて（風はひどく並木道の白樺を揺すぶっていた）やっと生えだしたばかりの翼を、頼りなげに広げたまま、じっとしていた。犬は静かに子雀に近づいて行った。急にかたわらの木から、すばやく、胸の黒い親雀が、つぶての様に、犬の鼻先へ飛びおりて来た。絶望の余り、全身羽を逆立て、しどけなく、あわれげに鳴き叫びながら、犬の、大きな歯をのぞかせて開いた口に、2度程も飛びかかった。親雀は子雀を助けようと、身をもってかばうのであった。けれど、小さな全身は恐怖にわななき、声はみだれ、しわがれて、とうとう気絶してしまった。かれは身をいけにえにしたのである。かれの目には犬がどんなにか大きな怪物に見えたに違いない。しかもなお、かれは、安らかな枝の上に止っている事が出来なかったのである……。意志よりも強い愛の力が、かれを飛びおろさせたのであった。私のトレゾル（犬の名）は、じっと立ち止って、あとずさりした。……犬もまた、この力を認めたものとみえる。私は急いで、うろたえていた犬を呼びもどし、敬虔の念に打たれながら立ち去った。そうだ、笑ってはいけない。私はあの小さな悲壮な小鳥に対して、小鳥の愛の衝動に対して、尊敬の念を抱いたのである。私は考えた。愛は死よりも、死の恐怖よりも強いと。それによってのみ、愛によってのみ、生活は保たれ、押し進められて行くものであると。」

III 遊戯本能 (Play instincts)

ふざける, **Playful activity.**

足でけり上げる, **Kicking by baby.**

手を只ふりまわす, **Throwing arms about.**

移動能力, **Locomotion.**

頭を持ち上げる, **Holding up the head.**

起き上る, **Sitting up.**

両脚を交互にけって前進する, **Kicking with an alternate motion of the two legs.**

這う, **Creeping.**

よじのぼる, **Climbing.**

音声化, **Vocalization.**

号泣, **Crying.**

喃語, **Cheerful babbling.**

手あそび, **Manipulation by baby)**

物に向け返す, **Turning things about.**

物を引く, **Pulling things.**

物を押す, **Pushing things.**

物をおとす, **Dropping things.**

物を抛り投げる, **Throwing things.**

物を叩き合はす, **Pounding things.**

探索や好奇, **Exploration or curiosity.**

手にとって物をしらべる, **Examination of objects by the hand.**

口をもって来て物をしらべる, **Examination of objects by the mouth.**

不意の物音にきき耳をたてる, **Listening to a sudden noise.**

動く光を眼で追う, **Following a moving light with the eyes.**

光っているものに眼を注ぐ, **Fixing the eyes upon a bright object.**

物をあちろこちらの方向から見まわしてしらべる, **Exploring** object visually by looking successively at different part of it.

香を嗅ぐ, **Sniffing** an odour.

質問する, **Asking** questions.

注意, **Attention**.

推理, **Reasoning**.

用心して手控える, Tendencies running counter to exploration and manipulation.

用心, **Caution**.

満足・くつろぎ, **Contentment**.

笑い, **Laughter**.

闘争, **Fighting**.

防禦, **Defensive**.

攻撃, **Aggressive**.

自信・自己主張, **Self-assertion**.

障害をのり越す, **Overcoming** obstruction.

人の支配を拒む, **Resisting** domination by other persons.

自分の力を物事に試す, **Seeking for power** over things.

他人を支配しようとする, **Seeking to dominate** other people.

競争する, **Rivalry**.

負けず嫌い, **Emulation**.

服従, **Submission**

障害に屈服する, **Giving up** in the face of obstacles.

可塑性・柔軟性, **Docility** of the child.

他人の支配に甘んずる, 長いものにまかれよ, **Yielding** to the domination of other persons.

以上, Bernard に依った Woodworth は, 広義の機能主義の立場に立って, McDougall の行動主義を更に押し進め, 全く, 行動の分類の観がする本能分類を成し遂げた。これは私が要求論の基礎(1)で述べた, 反射学, 特に, クーベルニックの新生児の反射運動, E. Dewey 女史や武政太郎の局部的特殊反応を本能の側面からみ, 更に発展させたものということが出来る。しかし, そこには, J. B. Watson のような単純な S—R の連鎖に止まらないところがあり, 有機体としての生活体に対する深い理解がある。故に, 彼を以て刺戟—有機体—反応(S—O—R)の図式を提唱した, といわれる。彼は, この体系を, 「動的心理学」(“Dynamic Psychology 1918”)で説明し, 心理学界に広く影響を及ぼした。彼は, 生活体の根本の力(エネルギー)は, 動因(drive)であるとし, McDougall の propensity 論(衝動論)に次いで, 動因論を展開した。彼の行動に関する理解は深く, McDougall がホルマー(hormē)という言葉を使って, 本能を新らしく見直したのと等しく, 行動解発力を示す動因(drive)という用語を使って本能を新らしく解釈し直したのである。われわれもこのように, 本能(instinct)という言葉, 素直に受け入れるが, その言葉の明瞭化(clarify)を行って洗練された言葉にしなければならない。すなわち, McDougall の本能論, Woodworth の動因論という古典を受け入れても, その中での祖述に終っておっては駄目で, 素直に受け入れるが, 又, それを壊してみても, すなわち, 批判して

みて、そして新しく造り直す、建設する、すなわち、古典的学問を新しく見直すなり意吹きを与えて、現代に生きる学問にしなければならないと思う。それは、若い者がやるべきである。でなければ、古典的学問は死んでしまう、形骸を残すのみとなるであろう。そして、後世の者は、古きよき者を死なせておいて、何もようしないという結果になってしまうのである。現代の要求論の前には何があったかということ、すなわち本能論があり、20世紀初頭には、McDougallの衝動論(propensity theory)、Woodworthの動因論(drive theory・S—O—R説)、Pavlovの条件反射学(conditioned response theory)、J. B. Watsonの行動主義(Behaviorism, S—R説)が開花したということは、この、古典を打ち壊して、新しく自分で感じとったところのものを企投(entwerfen)したのである。こうしてのみ、学問の生命があり発展があるのである。それで、Woodworthの本能論も、随処に、反射の分類じゃないかと思われる個所もあり、それはそれで不十分な分類であるが、また、これはこれで意味があったのであるが、動機(motives)反応(responses)という言葉を使ったり、社会行動の分類への道などを開くことによって、行動科学を推し進め、現代の要求論への跳躍台を作ったのである。かくして、彼の本能論(正しくは動因論)は、新しく検討されるべき過渡的存在であった。また、McDougallには、この、Dynamic Psychologyを押し進めたという点と、第一次大戦で神経異常者の検出に用いたPersonal Data Sheetは、質問紙法による性格検査の第一歩を築いたという貢献がある。

〔主著〕Psychology, 1908. Contemporary Schools of Psychology, 1931. Experimental Psychology, 1938.



第二の注意さるべき本能リストは、増田惟茂のもので、彼は、本能に5つの系(corollary)を考えて、その5つの系の下に本能を新しく解釈した。各系は互に次元を異にし、かくしてその系の下位概念たる本能特性をより明らかにしたといえるであろう。

○第1部門—自己の生物的存続に必須な物質の摂取に関するもの。

- 1) 栄養本能
- 2) 呼吸本能
- 3) 温度に対する本能

○第2部門—自己の生物的存続に邪魔になるものや、損傷を与えるものを排除防止する本能。

- 1) 排泄本能
- 2) 防御本能
- 3) 休息および睡眠の本能

○第3部門—特に他人またはこれに準ずるものに対する親和的本能。

- 1) 性的本能
- 2) 親としての本能, 子に対する慈愛本能
- 3) 子としての本能
- 4) 群居本能
- 5) 好意的本能

○第4部門—社会的本能など。

- 1) 嫉妬
- 2) 競争

- 3) 誇示的本能と退讓的本能。または押し強くでる本能と折れてでる本能
- 4) 模倣
- 5) 褒貶賛否，許可不許可などに関する本能的反応
- 6) 他人に対する一般的関心

○第5部門—比較的多種の意義を有しうる本能。

- 1) 恐怖・逃避の本能
- 2) 憤怒・争闘の本能
- 3) 支配的傾向と屈從的傾向
- 4) 獲得・狩猟・所持・貯蔵・蒐巢
- 5) 居住本能
- 6) 移住と望郷
- 7) 消潔
- 8) 好奇心・探索本能
- 9) 遊戯
- 10) 諸本能の部分的な活動またはその部分的な傾向として歩行・彷徨・追従・右利き・左利き・発声・握ることなど。

かくして本能は、現在では広く、生得的行動型と考えられるようになった。増田に於ては、いくつかの系を立てることによって、割合、すっきりとした形になった。しかし、これに属するものとして、いかなる範囲範疇を考えるかは、学者によって一定していない訳である。しかし一般に、生得的行動 (innate behavior) と考えられたものは、反射 (reflex) ・走性 (趨性 taxis) から、条件反射 (conditioned reflex) を含む複合的な生得的行動が考えられた訳であり、後者程、本質的次元に於ける本能と考えられるようになった。これに属するものとしては各種の性的行動 (sexual behavior) ・社会的行動 (social behavior) ・帰巢 (homing) ・移住 (migration) ・貯蔵行動 (hoarding) ・造巢 (shelter building) ・摂食 (food-seeking behavior) ・闘争 (aggressive inclination) ・母性行動 (maternal behavior) などがとり上げられ研究された訳である。

こうして行動科学の枠内で、反射と本能の問題について考えるとき、本能と反射を、目的的に区別することは出来ない。いずれも、生への衝動の内に、関係変数するものであるという系列に入ってしまうのである。この点について、Pavlov, I. P. は次のように言っている。

第一に、本能と反射を峻別する目標がない(図1参照)。通常、反射と本能との中間には、いずれともつかない多数の介在的反應が存在している。例えば、鳥が餌をついばむ行動と、眼前に何か飛んで来た時頭をさける行動とで、前者を食餌本能、後者を防禦反射と呼んで区別しなければならないという理由は見出せない。求食反射・防禦本能でも、十分に理解できる。すなわち、生への反応という大目的の下にこれらは理解されうるからである。

第二に、本能は反射より複雑なものであるといわれているが、例えば、嘔吐のような反射は、性的本能よりも極めて複雑なものであり、複雑—簡単という次元では割り切れない。

第三に、反射は単純な (simple) 反応であるが、本能は長い列をなし、それからそれへと順序を経て続く動作であるといわれている。しかし、連鎖反射の事実を考えてみれば、

これが、本能と反射とを区別する特徴とはなりえない。

第四に、本能は、生活体の内部状態、個体内条件に関係しているといわれているが、特に気質に於て、しかしこの点では、反射も中枢の興奮性に関係し、中枢の興奮性は、生活体の各種内部条件に左右されているのであって、この点でも両者を区別する理由にはならない。

以上四点に於て、Pavlovは、反射学と本能学とを、自己の実証科学的、生理学的神経学から批判反省しているのである。

なお、Guillaume, P. や、Tinbergen らは、走性をも本能的行動の中に含め、特に後者は、定位的行動として走性を理解することを主張する。Tinbergen はまた、本能行動の低次の段階として、運動反応 (motor response) を含み、ここに反射的の反応を認めているのであって、かかる意味では複合的な本能行動の一部として反射が含まれることになる。

しかし、このように、本能論の進展を見て来るとき、とにかく、反射ないしは本能という言葉づらをとらえて、これを確と規定し、その下で、これは反射リスト、これは本能リストと峻別することは無理があり、ここで到る処、何らかの高次の説明概念が要されることになる。

Woodworth の D (動因)→R (反応) という公式は、これを救うかにみえたが、リストに於ては、旧来の考えを修正することが出来なかった。

しかし、われわれは、これに悲観してはならない。行動科学への胎動がここにあったからなのである。すなわち、生への衝動 (living drive) という大目的の下に、行動 (behavior) というものを、広い視野から見ようという動向があったからである。つまり、力動論への動きである。かくして、反射は、最も単純素朴な反応のみをさし、高次の理性のあづからぬ幼稚な中枢の反応のみをさすことになり、本能は、本当に盲目的な、これもまた低次の精神のみをさす、動物的な、固定的定型的静態的な概念となったのである。

今や行動が主題であり、反射や本能は、要求論の基礎学として、行動学の初歩学と見なされるようになってきている。かくして、S—R説、(更にS—O—R説)が風靡するようになった。

S (刺激)—R (反応) $\left\{ \begin{array}{l} \text{reflex} \\ \text{response} \end{array} \right.$

以前に於ては、S (刺激) の位置に instinct の S があった訳である。

IV S. Freud の衝動論 (Freud's Psychodynamics)

人間の本性を、本能に求め、その枠組のなかで、傾性 (後に C. G. Jung の向性の概念になる) の概念に発展させた W. McDougall の心理学は、それでも static であった。これを本当に dynamic に発展させたのは、20世紀前半の偉大なオーストリアの精神病学者で精神分析学の創始者 S. Freud (1856~1939) であった。心理学の歴史の前後関係に於て、Boring は、次のように Freud の位置について言っている。「心理学者が、見ることができ、しかも手に入れることができるような所に、心理学の dynamic な概念を置いたのは Freud であった。心理学者達は、ゆっくり、しかもためらって、その概念を採用しはじめ、多くの附属物を排除しつつ、数種の原理を採用した。心理学の歴史は、Freud の名前を挙げることなしには、以後3世紀の間に記述されうることはありそうもないのである。しかも、それが心理学の一般史であることを要求すれば当然である。」(Ernest R.

Hilgard : Theories of Learning. Chapter 9. Freud's psychodynamics. p. p, 290 ; cf. Boring (1950), page 707. Appleton-Century-Crofts, Inc. New York. 1948¹, 1956² (Second Edition).)

McDougall によって表明された生命観は、ホルメの語に代表され、Freud も Trieb (衝動) の語を根底に置いたが、前者はまだ static で、出来上った成人の心理を以て体系づけた観があり、それだけ固い心理学であった。それに対し、Freud は、臨床的観察から、数々幼児期を問題とせざるを得なくなり、ここで発達心理学的観点が入って来ることになる。McDougall の心理学が、行動の範囲の決定に於て dynamic にならざるを得なかったのに反し、Freud のそれは、人生史的・発生史的に dynamic にならざるを得なかったのである。McDougall のそれが、その意味で、反射学との袂を分かつことが出来なかったに反し、Freud のそれは、無意識の存在の設定において反射学と袂を分かち、はっきりと現代心理学の性格を備えることができた。この意味で、Freud の心理学は、深層心理学 (depth psychology) といわれる。

図2 McDougall の表層心理学と Freud の深層心理学

表出(Ausdruck)	McDougall の静的心理学		精神分析が取扱う表出心理学	
	意識的表出	単純反射	前意識的表出	無意識的表出
原因	意識的	意識的	意識的	無意識的
内的関連	意識的	無意識的	無意識的	無意識的
外的表示	意識的	無意識的	意識的	意識的・無意識的
例	威嚇しようとの意図 →怒った表情 →闘争本能	恐怖 →瞳孔散大 →逃走本能	願望 →読みちがい 書きちがい 矢錯行為	無意識的願望 読みちがい、又は 自動運動
心理学の領域	意識的心理学	反射心理学	深層心理学	(depth psychol)

Freud 心理学の方法は、了解心理学的方法であると Jaspers は指摘するが、これは、McDougall のそれにも当てはまる。心理学は、一方に於て自然科学におけると同様、因果的連関を発見し、普遍的法則を構成せんとすると共に、他方、直観的洞察によって、了解的連関を把握せんとするのである。「かかる了解心理的方法は、行動主義の如く頑強にこれを否定する学派を除けば、Spranger など、Dilthey の流れを汲む了解心理学者はもとより、意識的・無意識的に一般の心理学に於て用いられているものである。」(宮城晋弥) K. Koffka (1886~1941) は、「分析的な外からの過程観察・過程分析 (process analysis) の他に、個体の行動を全体的に把握するためには、行動観察 (生きた知識の獲得) を必要とする。」「行動を記述する際、単に姿勢や筋肉の状態、呼吸数、脈搏数のみならず、‘犬は飼主の手に心を傾けている’ という如き表現を用うべきだ。」として、行動的環境 (behavioral environment) を提唱した。

註：行動的環境とは、人や動物について考えられるもので、それぞれの生物個体にとって生物学的意味をもち、その行動の内容を規定するのにあずかる特性的な外来の影響の総体で、いわば柳緑花紅の現象世界を形成する。これこそ生物個体が生存を営み、生活行動を推進する行動の場にほかならない。(佐久間鼎)

さて、Freud の心理学は、McDougall 同様、目的的心理学であった。正に彼は、日常生活に於ける、いい誤り・書き誤り・夢・神経症症状など、われわれにとって、無意味な現象の中に意味を発見せんとした。全ての人間の現象を「有意義的なもの」として把握し、無意味なる心的活動は存在せず、と主張した。「全てこの心的活動を意欲されたもの、目的（一定のものでないとしても）への傾向をもつものとする Freud 心理学は、purposive psychology（目的心理学）であり、この点に於て、アリストテレス以来、ショーペンハウエルを経て、Bergson に至る主意説の流れに属するものである。」（宮城）

Rousseau (1712—78) は、「もし発見する能力をもっていさえすれば、心の中に原因を見出し得ない様な機械的運動は存在しない。」といったが、正に、McDougall は、人間性の目的性の故に、兎角、ホルメが分散的になって、本能分類の並列的敘述に終らざるを得なかったのに対して、そして、反射学との袂別がつけにくかったのに反して、Freud は、ホルメ (Freud に於ては Trieb) の母胎を Es (又は id) とし、この母胎たる Es から、Ich (ego), 更には Über-ich (super-ego) を導出することによって、その平面性からのがれ、立体的な人格論を展開した。そして、衝動の方は、自我本能 (ego instinct) と性本能 (sex instinct) の2つに集約し、まとめたのである。ここに於て、雑然と分散的に列挙された本能 (行動分析) は、Es という深層的な母胎をもち、本能という現象が、精神分析的な人格論の一貫として、繋留されることになったのである。衝動の2型として集約された Freud の本能論は、次のような発展がある。

○Trieb の2型の概念の発展

- I { 1) 自我本能 Ich-Trieb…自己保存本能
- { 2) 性本能 Sexual-Trieb…種族保存本能
- ↓
- III { 1) 広義の性本能 Fros-insturct…生産的本能, 自我—性本能。
- { 2) 攻撃本能。破壊本能 Destruktions-Trieb
- ↓
- II { 1) 生の本能 Eros→libido は、生の本能を起こさせる Trieb に対して名づけられる。
- { 2) 死の本能 Todes-Trieb

結局、Freud の本能説は次のようになる。

- { 生の本能 (life instinct. エロス) { 自我本能 (ego instinct)
- { 性本能 (sex instinct)
- { 死の本能 (death instinct. タナトス)

Freud のいうエロス (生の本能) は、生存対抗力としての力 (リビドー) をもち、1つの緊張状態をもつのであるが、タナトス (死の本能) は、無機的状态にかえろうとする強迫をもつのである。

Freud によれば、本能は、心的エネルギーの量であり、心理 (mind) の働きに加算される。本能は全て、パーソナリティの心的エネルギーとして総和されうる。かくして id は、このエネルギーの貯蔵所である。そして、id は本能の座でもある。パーソナリティの機能のために流れる心理学的力を供給する発電機が id である。この力は、勿論、体の物質代謝過程 (ホメオスタシスの基底) から派生する。こうして、Freud は、本能に、4つの特徴を認めた。

1. a 'source' …=bodily condition or a need
2. an 'aim'
3. an 'object'

4. an 'impetus'

目的は身体興奮の移行である。飢えの本能の目的は、食物を食べることによって完成され、栄養欠陥をなくすることである。願望の出現とその充足の間に介在する行動の全ては、目的方向の下に包含される。かくて目的は、要求を満足させる特別な条件に関係するばかりでなく、必要な条件を獲得する際に起る行動の全てを含んでいる。本能の衝動弾力 (impetus) は、存在する要求の度合によって決定される本能の力 (force or strength) である。身体的弱化が起る程、栄養が欠乏すると、本能の力はそれに応じて大きくなる。(しかし要求は大きくなっても、行動解発因としての動因は小さくなるかもしれない。)

この4つの特徴を概念化した Freud のモデルは、緊張解消 (tension reduction) のモデルである。人の行動は、内的刺激 (internal irritants) によって解発され、妥当な行為が、その興奮 (irritation) を除去し減ずると鎮まる。これは、本能の目的が退行的 (regressive) であることを意味する。本能の目的は、本能を、発現前の状態に還元することであって、そのため退行的なのである。パーソナリティのこの以前の状態は、関係的に無風の状態である。本能はしたがって保守的 (conservative) である。この意味で、Freud の本能論は、T. Parsons のパーソナリティ体系論と同様に、平衡維持体系 (equilibrium-maintenance system) を持っている。行動の方向を統制するものは、一種の equilibrium を再興せんとする tendency である。こうして tension が解消される。Freud は、a return to a constant state についていっている。これは、Cannon 以後の physiologists が、homeostasis について言及するのと同じものである。そして、本能が興奮から始って、休止で一区切りがつけられる one cycle は、反復強制 (repetition compulsion) と、Freud によって名づけられた。そして本能は、本能の源泉や目的は、身体的成熟によって変化させられることがなければ、人生を通じてコンスタントにある。新しい本能は、新しい身体的要求が発達すると現われるが、その願望充足 (wish fulfillment) の手段は、人生の間に可成り変化する。この目的選択の変異は、心的エネルギーが置換的 (displaceable) であるが故に可能である。それで、パーソナリティ内に障壁があると、エネルギーは他の目的に投与されうる。これは代償的である。このエネルギーが、多少共永久的に代償物に投与されると、その行動は、派生的本能 (instinct derivative) といわれる。赤ちゃんが親指を吸ったり、足指で遊ぶなどは、こうして性的本能の派生物である。この転位は、パーソナリティ力動 (Psychostasis) の重要な側面を表現し、大人の興味・選択・好み・習慣・態度などは、原本能からの転位を表出することが多い。かくして、Freud の衝動論は、本能が人間の行動の唯一無二のエネルギー源であるという仮定に基づいている。こうして、Freudian theory と、学習理論との相似点は、次のように対応させられうる。

1. the pleasure principle — law of effect
2. the reality principle — trial and error theory
3. repetition-compulsion — habit strength

本能の数と種類については、Freud は、その本能が依っている身体状況について十分知られていないと感じたので、本能のリストを描き上げようとは試みなかった(前出)。これらの有機的要求との同一視は、生理学者の仕事であって、心理学者の仕事でないと考えていた (Calvin S. Hall & Gardner Lindzey)。Freud は、どれだけ多くの本能があるかを知らうとはしなかったけれども、本能は、2つの一般的な系統の下に分類されうると仮定していた(前出。 1) the life instinct. 2) the death instinct)。生の本能は、個人の生

存 (Ich-trieb) と種族保存 (Sexual-trieb) のために与っている。飢え・渴き・性はこの範疇に入る。生の本能がこの仕事を行うエネルギーの形態は **libido** といわれる。

註: libido (性欲・性的衝動) は、本来ラテン語で、「欲望」という意味であるが、1898年にモルガが性欲 (拉 libido sexualis) という意味に使った。

Freud によると、飢えが栄養摂取の衝動 (摂食衝動) を発動させる力であるように、libido は性衝動 (性欲) を発動させる「力」である。それは性欲を dynamic に表わしたものであり、性のエネルギーである。しかし、Freud は、幼児性欲も認めているところから、性欲といっても広い (汎性説)。libidoは、ある対象に注がれ、付帯化 (Besetzung) する。かかる libido は、「対象 libido」であり、逆に自我に蓄積充電された libido は「自我 libido」又は、「narcissic libido」である。彼は、初期には、libido と自我衝動 (自己保存衝動) とを対立させ、ego instinctは、Freud のことばで、「自己保存の本能」(W. Wundt) に相当するものであるが、ナルチズムの考えが出現すると共に、性衝動が自己に向けられる場合が認められ、これを除いたものが ego instinct (自我本能) と称せられた。

図3 Freud の本能論の発展

第一期	自己保存本能	種族保存本能
第二期	自我本能	ナルチズム
第三期	死の本能 (タナトス)	生の本能 (エロス)

Freud にとっては、外界を支配し、外界の危険から自己を守る ego instinct は、性的快楽への衝動に動かされることに対して防衛する傾向と同じ心的装置 (Der psychische Apparat) でこれによって社会的環境に適応可能な Socio-stasis を示唆する。ego instinctはsex instinct に対立し、性本能にブレーキをかける (抑圧) のものであるが、1923年頃から、彼が、libido (性本能) と自我衝動 (自己保存衝動) の一部を合せてエロス (生の本能) といい、それをタナトス (死の本能) に対立させた以後の説では、自我 (ego) に利用されるエロスの部分と定義することができる。

Freud によって大いに注意を払われた生 (Eros→life) の本能は性 (Eros→sex) の本能である (汎性説)。そして、精神分析の初期の時代においては、これは遍在的本能と考えられていた (1905)。現に、性の本能は、one instinct ではなくて many instincts である。すなわち、性的願望 (erotic wishes) を起す多くの separate bodily needs がある。これらの願望の各々は、集合的に性感帯として関与する異った身体部位にその源泉を持っている。性感帯は、極度に興奮に感受的な一部の皮膚や粘膜であり、ある方法で manipulated されると興奮 (irritation) を除去し、快感を産み出す。くちびるや口腔は、かかる性感帯を第一に構成し、第二には肛門領域、第三には性器がかかる性感帯 (erogenius zone) を構成する。吸啜は oral pleasure を産み、排泄は anal pleasure を、massaging や rubbing は genital pleasure を産む (pleasure principle)。幼時に於ては、性的本能は比較のお互いに独立しているが、思春期に達するとこれらの性本能は一緒に融合して生殖の目的に与る。

死の本能は、Freud が destructive instinct といっているように、その仕事は、生の本能よりもそれ程目立った働きをしない。そして、この理由のために、これについて知られることが少い。そしてこれが必然的にその使命を完成するのとは又別で、破壊への衝動とは、極めて単純な動機なのである。人は全て死なねばならぬようにできている。この事実を、Freud を、有名な断定 (運命論) に公式化させることになった ('the goal of all life

is death' 1920 a, p. 38)。彼は、死の本能が、その仕事を行使するエネルギーについては、特に名前をあげていない。したがって、われわれは、Neo-Freudian の示唆の下に、文化的平衡と心理的平衡の矛盾であるというに止めたい。

Freud の死の願望の仮定は、Fechner によって公式化されたように、the constancy principle (エネルギー不滅の法則) に基づいている。この原理は、全て生の過程は、無生物界の平衡 (stability) に返る傾向のうちに含まれる。Freud は、「快楽原理の彼岸」('Beyond the pleasure principle' 1920) に於て、死の本能の概念を持ち出した。「生ける物は、無生物によって行使される宇宙力の行為によって進化した。これらの変化は、最初高度に不安定であって、直ちにそれ以前の無機状態に戻された。しかし次第に、生の長さは、世界の革命的な諸変化の故に増したが、これらの不安定な生ける形態は、常に結局、無生物の安定性に負ける。生殖のメカニズムの発達と共に、生ける物は、それ自身の種類を繁殖させることができたが、無機界から創造されるということに依らねばならなかった。だが、この前進と共に、一種の個々の成員は、必然的にエネルギー不滅の法則にしたがった。これは、その種の一成員が生を賦与されるとその存在を支配した原則の一つである。」 Freud は、「生は死に至る1つの回り道に過ぎない。」という。この辺のところは、Freud の心理学が、生物学主義だとされている一般論に対し、無機的運命的解釈がかっている。人間にあてはめられた動物心理学であって、人間のための人間心理学には程遠い、無機的運命論に陥入っている。パーソナリティを一つの建物にたとえるならば、Freud の心理学は、Bins wanger への書簡の中でみられるように、彼は「いつも建物の一階や地下室にばかり止っていた。」古沢平作博士は、Freud の無意識的防衛 (抑圧) の概念を、仏教における「無明」として理解し、「迷い」は、本来、心身一如である人間に起こる心身の対立であり、救いは、この葛藤の解消、すなわち意識と無意識の和解によって得られ、それは自然法爾の姿であるという観点から、Freud 像を形成したが、ego の Realitätprinzip の枠内では、フランク的な高層心理学や therapeutic な人間改革の道は見出せない。それは何よりもまず、無意識を重視し、パーソナリティの中心に Es を持って来て、自我の存在は、示唆するだけにとどめたところに不十分さがある。この不十分さを克服して、人間性の心理学になるためには、社会的ホメオスタシスや文化的平衡論を展開し、葛藤 (conflict) は精神内部の問題ではなく、また、先天的・生物学的に決定される本能の発達図式ではなく、実はその個体の成長する特殊な社会的・文化的条件に基づくとした Karen Horney, Fromm, Harry Stack Sullivan, Abraham Kardiner らの Neo-Freudian (修正フロイト派) にまたなければならなかった。また、自我が、本能的欲求からも、外界現実からも独立した機能を保持する事実を、自我の自律性 (ego autonomy) と呼んだ、Heinz Hartmann (1894 ~) の自我心理学への発展を俟たなければならない。

しかし Freud は、次のような日常会話を支配する4つの factor 認めていた。

○口述への4つの factor

1. 外界の刺戟。
2. 身体の状態。
3. 心に抱く何らかの目的。
4. 無意識の (中の) 衝動。

自由連想法に於ては、1, 3, が完全にはぶかれる。外界の刺戟の最大限の排除を試み、したがって、視覚的にも聴覚的にも、医者との現存在程度は極めて低いといわねばならぬ。

しかし、McDougall によって創始された行動分析および力動概念の導入は、Freud に於て、如何なく発揮され、精神の発達段階 (Psycho-sexual development : Oral phase 0~1.5才, Anal phase 0.8~3.4才, phallic phase 5.6~12.3才, Genital phase) の設定と不安と防衛機制 (Angst und Abwehrmechanismen) の説によって、発達する自我 (developing ego) の心理的ホメオスタシス (Psycho-stasis) が明らかにされた。正に、精神力動学 (Psychodynamics) と言われる所以である。René Descartes (1596~1650) によって提示された肉体と魂 (Leib u. Seele) の問題は (Descartes に於ては未だ2元論なりしが)、20世紀の初頭、McDougall が出るに及んで、神秘的な本能論となるに及んで魂の問題は傾性 (propensity) と行動 (behavior) の観点の下に、気の心理学 (Seelenkunde) となったのである。更に、Freud に於ては、情意機能は一体化していると考えられ、Ödipus-complex などに於て、数々感情的解釈がなされる。そして、知性化 (intellectualization) が進むのは、ego の発達に於てである。そして発達する自我は、2つの過程を通してエネルギーの cathexis (配当) ないしは Besetzung (給付・給与) が行われる。

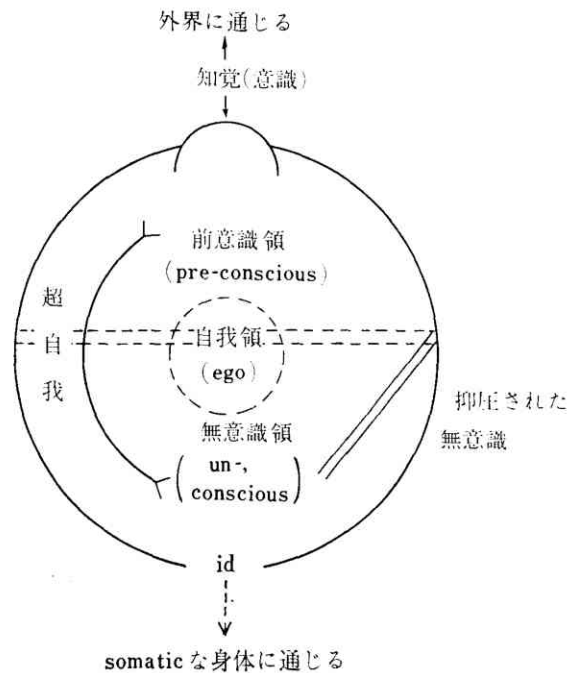
1. Primärvorgang—Lustprinzip……id
(一次過程) (快樂原理)
2. Sekundärvorgang—Realitätprinzip……ego
(二次過程) (現実原理)

McDougall に於て提示されなかった気の根拠は、ここで id として仮定され、次いで、一次過程を包摂しようとするその後の ego (自我) および sepper-ego (超自我・上位自我) という精神図式の中に気の心理学は、精神と肉体の一体的体制の下に見られるようになったのである。Descartes 的の二元論とその本有観念の説は、ここで一応克服された観がある。それは、私のいう心理的平衡 (Psychostasis) が、個人心理学的な人格論を通して人間性の学として一層推し進められたからである (拙稿「行動の生物・社会的次元—要求論の基礎(2)一」大手前女子大学論集第3号参照)。

猶、McDougall によって創始された社会的ホメオスタシス (Sociostasis), Neo Freudian によって指摘された文化的ホメオスタシス (Kultus-stasis), 更に、気の根本概念・人間性の要を形成するであろう自我 (ego) ないしは自己 (self) については、後に論じられなければならない。兎に角、前世紀から問題であった本能論は、Freud による id (または Es) の設定に於て、一応結着を見たということができる。

id には組織がなく道徳がない。Trieb (Freud 的 libido, Jung 的 libido) が混沌としていて、そして矛盾がない。ぶつかり合うこともない。どのような刺戟興奮も起きると同時に満足させられている (絶対万能期)。id は一生通じて続くものであり、id に含まれた一切の potential energy が、後の一切の活動源となる。Hilgard は、快樂原理を効果の法則 (law of effect : reinforcement theory) に、現実原理を試行錯誤説 (trial and error theory) に、反復強迫を習慣強度 (habit strength) に対立させて学習理論を展開し、「要求状態 (need state) は高度の緊張状態 (a state of high tension) である」ということで、「これを報酬 (gratification) を求める本能 (instinct), あるいは完成した反応に導く動因 (consummatory drives) という言葉で記述しようとも、同じ出来事の筋道 (sequence of events) について語っているに他ならない」といつているが、この問題こそ後述しなければならないところである。

図4. Freud の精神図式



註: Jung's libido: C.G. Jung (1875~) は libido を性的エネルギー(狭義のエロス)と考えず、広く生命のエネルギー、すなわち、Bergson, H. (1859~1941) のエラン・ヴィタル(仏, élan vital 生の躍動)と同様のものと考えた。A. Schopenhauer (1788~1860) や N. Hartmann (1882~) の主意説(Voluntarismus)の影響でもあるが、より心理学的解釈をなし、無意識(集合的無意識 collective unconscious)から意識に出て来る本能的エネルギーとしたのである。

V 仏教に於ける三界皆苦説と Freud の id 論

McDougall の本能論は当初、非常に生物学的で、観察されうる行動図(ethogram)をあげ、後に情緒や知性と関連せしめて、より心理学的な気の研究(propensity 説)となったと考えられるが、Freud の場合はどうであったろうか。

Freud の場合には、McDougall が、行動枠を展開的に社会行動にまで拡大していったのに対して、外的な刺戟から来るであろう行動は、外的因に還元することを出来るだけ避け、パーソナリティ体系に於て、出来るだけ有意義なものを精選して行ったのである。その結果、パーソナリティの力学に於て、根源的なものとして残ったのが、生得的な本能であったのである。したがって、Freud 於ける本能とは、全く精神物理的な、personality system の frame of reference 内に於ける「身体的・内的興奮の心理学的な現われたる Psychostasis」であったのである。それは、生得的系統に属し、色々な身体的興奮、生理学的衝動、心理学的な欲求(要求)であって、これは総括して本能といわれた。そして、この Psychostasis の向性は、libido に帰せしめられた。正に、仏教でいう欲望のことであり、欲界の問題である。仏教では、その心理学的現われ(Psychostasis)は、煩惱としてとらえ、12 因縁によって転生するというのであるが、Freud では一般には衝動(Trieb)という語を使っているようである。この意味で、仏教の煩惱説(苦説)と、精神分析に於ける不安論は近しく、仏教学者で精神分析に興味や関心を持つ人がいる位である。正に、

Freud が、個人は環境的刺戟からは自由でありえても、内的な本能的衝動、生得的・原初的な本能的衝動からは自由であり得ず、不安と防衛機制を湧出し、ヒステリーの原因となるといっている点は、苦や三毒（貪欲、瞋恚、愚痴）をしりぞける仏教説に類比的である。

註：煩悩（サンスクリットのクレスヤ kles'a から訳された仏教用語で、惑とも訳される）とは、人間完成への道程に対して障害となる心的状態をさし、conflict（葛藤、衝突、抗争）にあたる。煩悩には次のようなものが見出されている。

I 類、現象的分類

I, 根本煩悩

- 1) 6種煩悩…貪欲・瞋恚（怒）・愚痴・慢・疑（真理への疑い）・見（善悪や因果を否定するなどの誤った見解）
- 2) 10種煩悩…6種中最後の見を更に5種に細分する。

II, 随煩悩・枝末煩悩…放逸、懈怠（けたい）・不信（真理を信じないこと）・慳（ものおしみ）・嫉（そねみ）などの10種または20種がある。

II 類、性格的分類

- 1) 理知的なもの（見惑）……ロゴスの混乱、無知
- 2) 情意的なもの（修惑・思惑）……パトスの混迷

仏教に於ては、現象的側面の対症療法（therapy）をいうこともあるが、根本は性格転換（人間完成）にあり、第二類の分類が重要になって来る。すなわち、真言密教流にいえば、見惑は教相を究める、つまり、真理に対する理論的理解によって除去されるもので、これを達成すると当初の聖者（律師）になれるのである。また、修惑は、体験実践によって生活習慣を改善することによって徐々に完全円満な性格形成・態度形成がなされることをさし、事相上の陶冶の必要をいっている。かくて、見惑・修惑のすべての煩悩を除きつくす、すなわち、一切の本能的衝動の悪魔的性質を降伏し、完全円満なロゴスとパトス、叡知と愛情を最勝に得ること、持ち来たすことによって、人格完成者（阿羅漢、最高の聖者）となれるということをいうのである。

Freud にあっても、この生来的な本能に発する conflict を解消することが患者の義務となり治療となるのであるが、その義務というものは、兎に角、うまく適合した「対象」(object) との間でまともなオルガスム（性的極致感）を経験し、しかもそれを常時行なうことだ、と信じてこませ勝である。しかし Freud は、かつて、正常な人間として健全に行なえねばならないことは何か、という質問を受けた答として、質問者が何か混み入った答を期待していた意に反し即座に、「それは愛することと働くこと」(“lieben und arbeiten”) と答えている。E. Erikson (1902～) は、その著「幼年期と社会 (Childhood and Society) 1950¹, 1963²」で、その愛とは性器的な愛 (genital orgasm) をさしているといつて、「理趣経」に類比的趣（性器性の理想郷）をいっており、更に、「働くこと」と言った時、彼は人間が性器的な存在であり、人を愛する存在である権利と能力をもっと共に、それらを失う程にその個人を全面的に支配してしまわないような、一般的な労働一生産のことを指してこの言葉を用いたのであると説明している。

更に禪に於ては、坐禅という静的な態度のうちに於て、見惑と修惑を克服する気を養うことを立前とし、見性に於て煩悩を無意識底に滅却し、根本から性格改善を完成することをいう。そして、その底から、完全円満な人格が実践上に導出されるのである。更に、この人格を永続さすことこそ顕教の劫の考えで、Erikson の生産性 (generativity) にも比すべく、正眼の聖胎長養ということがいわれる。

正に、三界皆苦の覚悟あらば、失望や絶望に陥ることはないといっている仏教の根本義

は、自由連想によって葛藤（または **complex**：心的複合）を理解し、かくて自我の自由を企図する精神分析と対比されるところである。精神分析に於ける **id** の設定は、仏教に於ける苦観に通ずる。しかしながら、通説では、我（小我, **ego**）を滅却して大我（宇宙我）と一体化さすこと（身心脱落, 脱落身心）を以て特徴とする東洋思想に対し、西洋思想では、どこまでもその我は神に対する我であって、どこまでも我は我としての存在が主張されるのであるとする。前者に於ては、かくして、「お蔭で、お蔭様で」とか、「一切衆生」という言葉があるといわれ、後者に於ては、パトスという言葉に対して、エロスという言葉があるといわれるのであるが、この辺のところは、文化的心理 (**Kultusstasis**) または風土心 (**Geopsyché**) の問題として残された問題であった（前出）。兎に角、現代心理学で一般的な、緊張解消 (**tension-reduction**) によって究極的な平衡 (**equilibrium**) を求めるのが衝動であり欲望であるという大義に於ては、仏教も、精神分析も共通点を有し、われわれの問題としている現代心理学での要求論に教えるところが多いといえる。

VI まとめと残された問題

さて、こうして本能とは、行動の連鎖に於て了解されるものであり、行動連関に於てその機能を全うし性質を明らかにするものであるから本能的行動が明らかにされなければならない。一般に本能的行動の特徴 (**characteristics**) ないしは特性 (**traits**) とされているのは、生得性・固定性・種別性があるとされていることである。

1) 生得性…本能的行動は、系統発生的および個体発生的に規定され、その発現には、経験または学習の介在を必要としないといわれる。すなわち本能は生得的 (**innate**) であるということであり、本能的行動は、無学習行動 (**unlearned behavior**) なのであって、これは、習得的 (**acquired**) に対する意味で用いられるのである。そして、環境因子は、パーソナリティの生得的解発機制 (**innate releasing mechanism, I. R. M.**) に、その発現と刻印 (**Einprägung, imprinting**) と消滅 (**extinction**) との契機を与えるに過ぎない。しかし、性行動などは、**Freud** の幼児性欲論を除けば、それが生得的であるからといって、出生時において備っているという意味ではなく、ある程度の成長を俟って解発されるとしているのが一般的である。しかし、だからといって、性行動は生得的だときめつけることは難しく、生得と習得を厳密に区別することは困難である。ジェームズは、各本能は生涯において一度だけしか現われえないという立場をとるが、行動には **readiness** の問題もあり、原初的な体験は一回きりで、そうそう臨界状況に人間が立たされることもないであろうから、本能は、知性と併置して考察されなければならない。すなわち、臨界状況に立たされると、本能が頭をもちあげるといわれるが、**Frankl** の強制収容所の体験記でもわかるように、行動から解釈するならば、知能的な成分 (**V**) と本能的成分 (**C**) を抽出しなければならない。

註：**Alverdes, F.** によると、行動 **B** は、固定的な成分 **C** と、後天的に変化する部分 **V** との函数として表わされる。

$$B = f(C \cdot V)$$

この考え方によれば、本能は行動から、その生得的固定的な成分を抽出して考えられたもので実際の行動といえは、常に習得的・知能的な成分を含んでいるというのである。

2) 固定性…厳密な意味での固定性は、下等動物においてのみ明確に指摘されうる特性であって、一般的には、ある程度の変容性・可塑性が認められ、教育されうる素質が見出

されている。それで、固定的な行動も、その中間過程においては、転位行動 (displacement behavior or activity) が現われるから、過程分析をすればそれが、可塑性に連なることありうる。

註：イトヨの生殖行動中にみられる特異な行動様式：雄のイトヨは自分のなわばりに入ってきた入者に対しては攻撃するが、なわばりの外であればむしろ逃避する。しかし丁度自分のなわばりの境界で侵入者に会った場合には、攻撃と同時に逃避の双方の動因に刺戟されることによって、奇妙な「頭下げ威嚇姿勢」をとり、これが更に完全な砂掘りにまで発展する。この砂掘り行動は元来、巣をつくる反応の初めの部分であって、抑圧された闘争と逃避との動因の葛藤が、かかる奇妙な転位行動を示すのである (Tinbergen, 1951)。

この生殖行動に關与する「中枢」の機制はどうなっているかというに対し、Tinbergen はそれを仮説的に示している (1950, 1951)。まず、男性ホルモンや温度の上昇などの要因が最高中枢に影響を与え、イトヨは浅い淡水の方に移住をはじめ (移住中枢の働き)。この中枢からのインパルスは何等阻止されることなく、低次の中枢 (協応関係にあるもので、ひれ・ひれすじ・筋肉・運動単位など) に伝達されると仮定される。この低次の中枢は、ホルモン・内外的動機づけのインパルスなどによって負荷されていて、この中枢からさらに低次の中枢へのインパルスは適切なサイン刺戟が受容されるまで阻止されている (この中枢はなわばり中枢)。かくて、なわばりをつくるに適切な刺戟、例えば、薬類の存在や水温の上昇などによって I. R. M. が働くとき、ここから更に低次の中枢 (闘争、造巢などの中枢) へインパルスが流出する。しかしここでも又闘争や造巢中枢のブロックが適切なサイン刺戟によって除かれられない限りは、イトヨは回遊したり、敵や求愛相手待ちかまえたりするような欲求行動を行っているだけである。そこで、例えば、なわばりの中へ他の雄が侵入して来て、闘争が解発されると、イトヨは相手に向かって泳いで行き (欲求行動)、この敵がこんどは新しいサイン刺戟となり、それが完了行動 (咬みついたり、追跡したり、威嚇したりする行動) の一つを解発させることとなる。この完了行動の中枢のブロックが解除されると、それ以後は比較的単純な運動 (ひれ、ひれすじ、筋肉などの運動) を支配する中枢にインパルスが流れ (ここではインパルスの流出阻止はないと仮定されている)、かくて、次々と本能の連鎖によって本能行動が一つの経過をとる。ここで、比較的高次の中枢では、相互に抑制関係にあるとされている。(八木寛)。

固定性は、後天的な経験の如何に拘らず可塑性を示さない、ということを用いるものであるが、Kuo の実験 (電撃を与えてねずみを恐れる猫を作った) は、本能の固定性を否定した。

3) 種別性…本能的行動は、それを遂行する生活体の種々独特の行動様式があるとす。鳥の啼き声や姿が種によって異なるように、その巣の型も造巢行動様式も種によって異なるわけである。このように、生の型式 (type of life) が、種に固有の特徴的様相を示して、その行動も類型的であることをいう。

その他、次のようなものもあげられている。

4) 非可逆性…本能行動はその途中ではもとにもどること (可逆性) はできないということを用いるもので、固定性の過程的概念である。一連の本能的行動が経過している途次においては、それをもとに戻すことは一般に不可能であるが、しかしこのことは、本能的行動の経過が絶対的な一方向性をもっていることを意味せず、一連の行動経過は下位部分に分かれ、その部分相互間では可逆的でないにしても、一つの部分行動内では可逆的であることを示すものは、Alverdes の V の成分であり、Freud の昇華の機制である。

5) 盲目性…目標や手段についての明確な意識がなく、衝動的であることをいうもので、正常な条件では、動物は一般に驚く程巧妙にその生活環境に適応した行動を示すが、

ひとたび環境が異常になると、一変して全く驚く程愚鈍な、目標に関して無知な行動を起す。

本能は、Freud によると、その源泉・目的・対象・リビドー（力・エネルギー）をもっていると言われるが、それは身体的条件や身体的欲求（Freud によれば性の欲求、McDougall によれば慰安・娯楽の欲求）に源泉を有し、この身体的興奮を除去する（tension-reduction）ことが目的となるのである（goal-seeking）。欲求の出現とその満足との間に介在する行動（ランダム行動・探索行動）は、すべて本能の対象として考えられ、これらは、欲求を満足する特殊な事物や条件に給付（Besetzung）され本能的な価値をもつに至るのである。その根本の考え方の中には、「緊張とその解消」という見方があり、個人の行動は、何らかの内的な刺戟によって生じ、その刺戟〔イトヨの雄にとって求愛の相手となる雌はどんな雌でもよい訳ではなく、腹部の肥大した雌に限られる。また侵入する魚に敵意を示すのは下腹部が赤いサイン刺戟をもつもので、下腹部が赤くなければ、解発因子（releaser）とならない〕やいらだち（irritation）・おちつかなさ（uneasiness）を除去し解消するのに適切な行動を生ずることによって、平衡状態にもどる。本能は常に生活体を原初的な安定（Freud は幼児的な満足の状態、あるいは母体への復帰を考えている）にもどそうとし、また何度でも繰返してこの不安定—安定の周期が現われるということになる。この過程分析（Vorgang）に立って、Freud は、本能の目的は、退行的であり、反復強迫ないしは反復強制的であるといったのである。

かくして、W. Wundt. McDougall と Freud の本能論を総合すると、加えて3で割って、次の3種となる。

- 1) 自己保存の本能…摂食・所有・闘争・逃避の本能など。
- 2) 種族保存の本能…性・求愛・母性・父性・親性の本能。
- 3) 適応と発達の本能…模倣（学習）・遊戯（娯楽と慰安）・社交・労働（創作）の本能。

かくて本能は、生得性・固定性・種別性・非可逆性・盲目性・目的性・退行性・反復強迫性を有するのであるが、この特性は、反射（reflex）や走性（趨動性 taxis）にもみられるもので、遺伝的であり、発生的に固定的であり、種に固有な型等々をもっている。しかし、本能は、内的興奮により内的に動機づけられているという点（Thorpe, 1956）で、反射や走性と区別されるのである。W. Wundt も McDougall も S. Freud も、かくて情緒（emotion）や感情（feeling）を同時に問題としたのである。

註：W. Wundt には感情の三方向説がある。（拙稿「西洋の性格学—古典的体液気質論—」大手前女子大学論集第一号，p. 19. 1967. 参照）

ここで附加して注意すべき点は、動物と人間との間の関係であるが、遊戯説の遺伝反腹説が現実の構造と機能とを考えなかったことを反省の資として考え直さるべきであり、かくして、動物の科学的研究をもってその俚、人間の行動にあてはめることの非が正されるのであり、この事の証明を与えるものとして、（ロイド）モーガンの公準（Lloyd Morgan's cannon）がある。すなわち、人間の本能の問題を考えると、どうしても欠かすことのできないのは、発達の観点であり、すなわち成長（growth）の問題であり、この問題の追究は、Freud のあの dynamic psychology において成されたということができる。

註：モーガンの公準（Morgan's cannon）：「ある一つの行動が心理的尺度における、より低次の心的能力行使の所産として解釈されるならば、それを、決してより高次の、高層心理学（Victor E. Frankl）的なるものの所産として解釈してはならない」というもの。

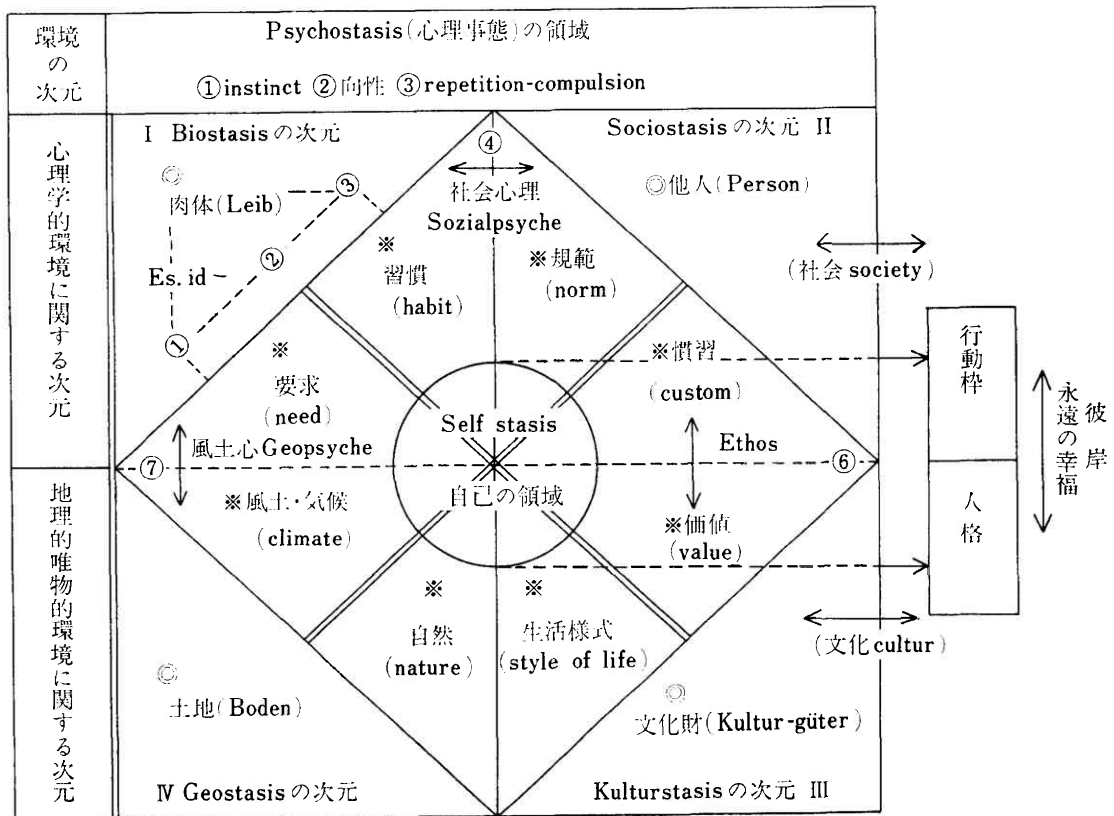
したがって、われわれのこの論攷の方向（人間性の心理学）は、動物心理学でもって擬人的解釈をするという所迄至らないのである。さて、これで、McDougall の static な観点は、Freud によって補正された訳であるが、ここに残された問題がいくつかある。1つは、Woodworth の動因論からなる生体（個体）または生活体（Organism）への注目であり、それはS—O—R理論といわれたのであるが、これは、要求論として後に述べられるであろう。もう一つは、Neo Freudian によって示唆された、社会的・文化的条件の研究である。第三は、この本能論では、余り明確に表われなかった地理的条件との関係、すなわち、自然現象と気の問題である。最も、McDougall の項で述べられた気の問題から追究することは問題があり、わずかに気の問題は、人間性の心理学で、関連的にその関係を述べる事が許されるものと思われる。したがって、W. Hellpach が示唆する Geopsyche のあり方も、この論攷の枠組においては、Geostasis として論じられた方がよさそうである。

その他、二・三の問題点があるが、ここでは論じることができない。

さて拙稿「行動の生物・社会的次元—要求論の基礎(2)—」（大手前女子大学論集3号）で方向づけられた人間性の心理学序説は、ここで、本能論における残された問題の中へ組み入れられるであろう。

さて、この論攷（人間性の心理学的研究）とは、未だ仮設の域を出ていないが、次のような枠組の図において一応示すことができよう。

図5. 本能論における心理發生的問題事態 (Psychogenesis) の図



- 註 1. ◎印：representative sign significance (代表的刺戟意味体) or stimulus value (刺戟としての意義をもつ刺戟価)：独語で示す。
※印：traits significance of each stasis dimension (各次元の特性指標)：英語で示す。
④：社会心理学の部門 (a disciplinary branch of socialpsychology)
⑤：文化人類学の部門 (a disciplinary branch of cultural anthropology)
⑥：社会人類学の部門 (a disciplinary branch of social anthropology)
⑦：風土心理学の部門 (a disciplinary branch of geopsychology)
- 註 2. : stasis なる語は Homeostasis (W. B. Cannon) から来ている。

参 考 文 献

- 1) 矢田部達郎監修「改訂心理学初歩」創元選書 253, 創元社, 昭31 (1956)。
- 2) 遠藤汪吉「心理学」三和書房, 昭26¹, 昭28⁴, (1953)。
- 3) J. B. Watson: Behaviorism. Norton & Company, Inc. Revised Ed. 1930. 安田一郎訳「行動主義の心理学」河出書房, 1968。
- 4) 吉田正昭「人間の科学としての現代心理学」NHK市民大学叢書 8, 日本放送出版協会, 昭44 (1969)。
- 5) 田中靖政「行動科学—情報時代の人間科学」筑摩総合大学, 筑摩書房, 昭44 (1969)。
- 6) 大脇義一ほか「現代心理学」心理学講座第一巻, 日本応用心理学会編, 中山書店, 1954¹, 1960²。
- 7) 八木寛編「心理学 I」培風館, 昭42 (1967)。
- 8) 世界大百科事典20, 平凡社, 1967¹, 1968。
- 9) W. McDougall: The Energies of Men, a study of the fundamentals of dynamic psychology. 1932.
- 10) Ernest R. Hilgard: Theories of Learning. Second Edition. Appletton-Century-Crofts, Inc. New York. 1948¹, 1956².
- 11) Carvin S. Hall & Gardner Lindzey: Theories of Personality. John Wiley & Sons, Inc. New York. 1957.
- 12) 宮城音弥・南 博・佐藤 正・霜田静志「教育と精神分析」東京教育大学内児童研究会編, 金子書房, 昭25¹ (1950¹), 昭27² (1952²)。
- 13) 土居健郎・小此木啓吾編集解説「精神分析」現代のエスプリ第四十号, 至文堂, 昭44 (1969)。
- 14) 八木寛編「心理学 II」培風館, 昭43 (1968)。
- 15) 相良守次編, 多湖輝・吉田正昭著「人間の欲望・感情」心理学入門講座新版 2, 大日本図書, 昭43 (1968)。